若松の本元飯豊山とは

一、飯豊山は福島県の山

飯豊（いいで）連峰の中心に位置する飯豊本山は標高二一〇五㍍、最高峰は、標高二一二八㍍の大日岳である。福島県・新潟県・山形県境に位置し、南東の三国岳から飯豊本山、御西岳までの幅約二㌔で約七・五㌔が福島県に属している。

江戸時代まで『福島、地理・地名・地図の謎』※1、によると、南側と尾根部分は会津藩が管理し、明治四年（一八七一）若松県に属したが、明治九年（一八七六）福島県に合併となる。若松県や磐前県の住民は、県庁まで遠く、津川は二泊しなければならなかった。そのため東蒲原郡は明治一九年（一八八六）新潟県に編入されることになった。その時、飯豊山頂は、実川村（新潟県阿賀町）所属となった。しかし、江戸時代から山頂部分の社は耶麻郡一ノ木村（喜多方市山都町）の飯豊山神社が管理していたことから、反対の声が出て、飯豊山は、麓の一ノ木と山頂の社は一つの飯豊山神社であると主張した。そこで、裁判となり、明治四十年（一九〇七）内務大臣の裁定により一ノ木村の主張が認められ、山頂部分の本山及び奥宮御西岳までの参道は福島県に属することとなった。

二、御神体は飯豊青命

飯豊山の御神体は『おんば様』※2、によると、飯豊青姫命（いいとよあおひめのみこと）を祀る五穀豊饒の神である。会津では、会津若松市大戸町闇川の本元飯豊山神社、会津若松市北会津町下荒井の飯豊山神社、県内では、平安時代の延喜式内社で白河市豊地の飯豊比売（ひめ）神社、白河市大信豊地の飯豊比売神社、郡山市の飯豊和気神社がある。飯豊青命は、奈良が発祥地で、雄略天皇の長女で、顕宗天皇の姉、二十二代清寧天皇と二十三代顕宗天皇との間、飯豊天皇とも称していた稲作の神、それが稲作伝播とともに茨城県の鹿島神宮や千葉県の香取神宮を経由して、福島県の棚倉方面に入り、白河市豊地に入り、白河市大信豊地から会津若松市大戸町闇川に伝わり喜多方市飯盛山を経て山都町へ伝わる。一方は天栄村飯豊から宮城県まで伝播したものである。

三、なぜ飯豊山（いいでさん）と呼ぶのか

全国的には、飯豊山は「いいとよさん」の呼ぶのが一般的な呼び名である。しかし、山都町の飯豊山は「いいでさん」と呼んでいる。会津若松市大戸町闇川入小屋には『おんば様』※2、によると、本元飯豊山（ほんもといいとよさん）がある。喜多方市山都町飯豊山に祀られている神様の本家、または姉とされるもので、大戸町闇川入小屋では、喜多方市山都町では飯豊山（いいでさん）の神様は、闇川の本元飯豊山から家出（いえで）をしたから「いえでさん」が変化し「いいでさん」と呼ぶようになったという言い伝えがある。

四、本元飯豊山（ほんもといいとよさん）とは

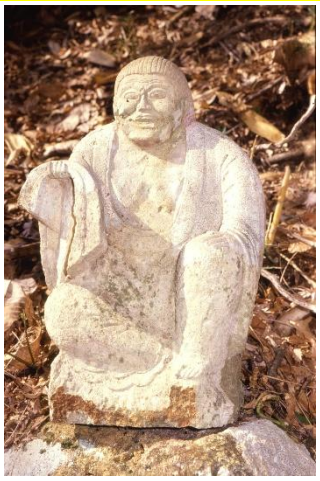
本元飯豊山は、大戸町闇川集落入小屋から林道を進んだ山にある。往復二時間程度で麓に降りることができる。参道入口に飯豊山の石碑があり、山道に入る途中の沢に「おんば様」と呼ぶ姥大権現の石像がある。高さ五〇㌢の座像で、女人はこの先の入っていけないという結界の意味があった。目が大きく、口を開け、恐ろしい姿をした老婆で、胸は乳が垂れ下がり、左膝が立て左手を添えられ、右足は折り曲げ、右手は手拭いのような物を持ち上げている。像の裏には「文化十二年（一八一五）八月八日　西川七蔵作」と彫ってある。沢や岩場の験道の道を進むと、約十五㍍の岩屋をくぐる胎内くぐりや岩場を鉄の鎖を伝って登る剣ヶ峰がある難所だらけ山道である。本元飯豊山の御本殿は、大戸岳北西に位置する標高八八三㍍の高畑山中腹、尾根よりやや下の標高約七五〇㍍南斜面が崖の岩場にある。祭神は、『おんば様』※2、によると「大己貴命　蒼稲魂命　飯豊青姫命」で、闇川地区の本山派南岳院霞下徳林寺に属している。飯豊青命を祀ることから、五穀豊饒の神として信仰され、修験の霊場として会津若松方面からの信仰が厚く、祭礼ともなれば宿坊となっていた。闇川地区入小屋の家々では、大勢の参拝者で賑わったと言われている。加藤家に伝わる掛軸には、飯豊山の三十神仏が描かれ、十四番目に「姥大権現」とある。九月の祭礼には、梵殿を持って本殿に参拝する。この本元飯豊山では、山都の飯豊山は、少しくらい盗みをしても登れるが、本元飯豊山は悪いことをした人は足を踏み外すと云われている。

※1、『福島、地理・地名・地図の謎』石田明夫、二〇一五年　じっぴコンパクト新書
※2、『おんば様』石田明夫　一九九九年　歴春ブックレット

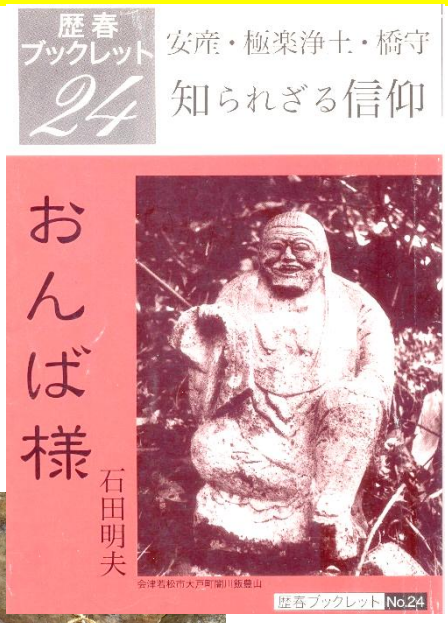
會津藩校日新館館長藩校館長・特定非営利活動法人会津阿賀川流域ネットワーク理事長　石田明夫

飯豊山と藤沢のおんば様

ジュネーブ大学の教授



本元飯豊山



本元飯豊山の胎内くぐり

藤沢のおんば様

飯豊山頂の社殿

五、藤沢のおんば様

喜多方市山都町の一ノ戸川と五枚沢川とが合流する藤沢地区の約五百㍍東、喜多方市見頃へ通じる国道四五九号、峠上に二間四方の拝殿と安産として知られる石像のおんば様がある。「おんば様」※2によると、高さ約六〇㌢の座像で、目を見開き、口を開け、胸が開けられてあばらが見え、乳が垂れ下がり、右膝を立て、右手をそれに添え、左手に綱を持ち、左足を折曲げている。拝殿は、藤沢地区の満蔵寺管理で、訪れる人はわずかである。四月二四日が祭礼で、藤沢地区の婦人たちが、食べ物を持寄って集まり、出店もあり念仏踊りもしたという。境の神、塞ぎの神として祀られたものが、後に安産として信仰されるようになった。なお、この像は『おんば様』※2の出版を契機にレプリカが千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館に展示され、全国的にも知られている。

六、飯豊山頂のおんば様

飯豊山の山頂に近い尾根稜線上に姥大権現と呼ぶ石造のおんば様がある。石に囲まれ、像の前には、大小の石がうづ高く積まれ、上半身しか見えないほどである。顔は、目が大きく丸くなり、口は開いているが、雪や風雨にさらされていることから磨耗が激しく、表情を伺うことが出来ないほどになっている。このおんば様は、修験道が盛んであったことから、女人禁制と、ここからは先は霊域とする結界の意味で置かれている。

會津藩校日新館館長藩校館長・特定非営利活動法人会津阿賀川流域ネットワーク理事長　石田明夫